

クリムトのような抱擁

望月苑巳

ひらひら舞いながら落ちてくる
花びらが宙でむつみあう
やわらかな抱擁を繰り返す
ぼくがもう忘れてしまったかたちのきみ
とろけるような優しさで

クリムトはおもむろに筆をとり、キャンバスの中にムートンのような愛をねつとりと厚塗りした。子供は産みたくない、ダダをこねていた女は情人に心を裏返されてあつけなく陥ちた。そんなはずじゃなかったと悔やんでみても後の祭り。船は次の港を目指して出航する。その日、地球は悲しいくらい隅々まで晴れ渡っていた。

あの日、木の下で孤独を振り払い
ぼくを抱擁したきみがいる
「ひとりでは抱き合えないのよ」と
白い歯をこぼして
はらはらと、はらはらと
甘くささやいたきみがいる

クリムトは金魚鉢の水がこぼれたら足してあげよう。猫のしっぽを踏んでしまったら頭を撫でながら許しを請うし、地球は平らだと主張する奴がいたら頬をひっぱたくだらう。それが良識コモンセンスというものだ。振り返ってみれば傷つけあった日々の方が愛おしく感じられるように、絵の具は残酷な色を使う。それも二重螺旋の良識。クリムトのみだらな良識。みだらな抱擁。

悲しみを心の内側にこぼしてしまつた日に限つて

弦楽四重奏は哲学的な対話をしながら満ちるのに

音楽が凍りついてしまうのはなぜなのか

そんな日に限つて

銀河と銀河の渦巻きが抱き合つて

ぼくときみが生まれたりする